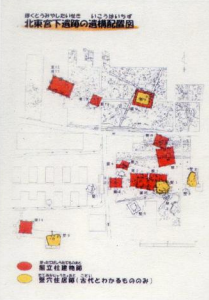
北東宮下遺跡

宅地造成計画に先駆けて資料を得るため、昭和59年～62年にかけて愛島東新丘陵の遺跡群詳細分布調査が行なわれました。当遺跡については、昭和60年より3年間発掘調査が行なわれ、縄文～平安時代にかけての複合遺跡であることがわかりました。古代の遺跡（平安時代）が主体で、溝跡で区画されたと思われる区域内に掘立柱建物跡（14棟）、竪穴住居跡（9軒）などがあり、特徴的な遺構として竪穴住居の柱穴が壁沿いや外にめぐるもので竪穴住居から掘立柱建物への過渡期の住居跡、倉庫などの建物跡が推定される掘立柱建物跡群が発見されました。これらの発掘調査の結果、この遺跡は、律令体制の末端機構（郷里）の一村落であると思われます。



Ⅰ-3-①

Ⅰ-3-②

Ⅰ-3-③-a

竪穴住居から掘立柱建物跡へ
移行する過渡期の建物跡

Ⅰ-3-③-a

Ⅰ-3-③-b

掘立柱建物跡（掘14）

Ⅰ-3-③-b

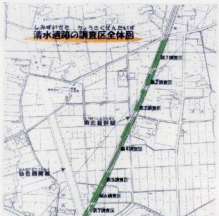
Ⅰ-3-③-c

焼失家屋跡（竪9）

Ⅰ-3-③-c

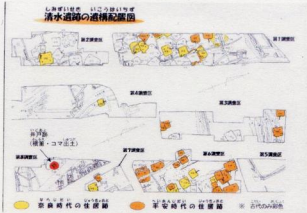
清水遺跡

東北新幹線建設に伴って昭和49年～53年に県教育委員会による発掘調査で古墳時代～中世遺構が多数発見され、大規模な集落跡であったことが明らかになりました。住居跡は古墳時代から見られ、奈良・平安時代（38軒）に最も数が多くなりました。遺構については他に溝跡や井戸跡などが発掘され、特に板で方形の井戸枠を組み上げた平安時代の井戸跡については規模・構造の点で優れており、中からは狐面や横笛などが出土しています。遺物については土師器や須恵器、鉄製の鍬や鎌、硯（須恵器転用、円面硯）、瓦などが見られ、墨書土器や硯の出土については文字の読み書きができる人がいたこと示しています。また、特定の建物（寺院・官衙）にしか使用されなかった瓦の出土もあり、この遺跡の集落が特別の役割を持っていたことが推測されます。



Ⅰ-4-①

Ⅰ-4-②



Ⅰ-4-③

井戸跡（清水遺跡）

Ⅰ-4-④

横笛・コマ

Ⅰ-4-⑤